平成 16 年度鳥取市政懇話会「文化観光部会」議事録

日時：平成 17 年 3 月 31 日（木）
午後 1 時 30 分～3 時 30 分
場所：鳥取市福祉文化会館 4 階第 2 会議室

○出席者

【委　員】池原委員、植木委員、岡垣委員、沖委員、下田委員、須崎委員、福本委員、森田委員、山本委員
※〈欠席委員：亀本委員、細田委員、森山委員〉

【鳥取市】林副市長、西澤企画推進部長、木村観光コンベンション推進課長、井上スタッフ

○協議内容

○井上スタッフ　今日の部会では、今回の資料でまとめた「８次総に盛り込むべきこと」を御確認いただき、膨らませる必要があるかどうかいうことを御判断いただければと思います。

文化観光部会の中では、広域での展開ということ、それと文化と観光を絡めてということで話を進めてまいったわけですが、さらに「人」という切り口で考えを深め、鳥取の先人、偉人を活用するということ、人だけではなく、それといろんなものを絡めてやっていったらどうかということで話を進めていきました。

具体的には、具体的な人としては、岡野貞一、吉田璋也、大国主命、大伴家持、尾崎放哉、池田光仲、この 6 名は、最初に取り組むべき人として提案をしたいということですね。さらに、その 6 名の人たちに絡めて、まずその観光ガイドを養成して活用する。頭の学問だけではなかなかつらいので、食も文化であるという視点から、食べ物もあわせて紹介していくべきだということ。さらに、4 番目としては、いわゆる体験、具体的に物をつくる体験。こういうものも積極的に入れてほしい、入れていくべきだということですね。最終的に、もう一つ、今後も引き続き市報、ホームページ、ケーブルテレビなどで積極的に紹介をするべきだということを前回の中でまとめたことです。

○委員　それではまず、お一方ずつそれぞれの方への思いをお話いただけたらと思います。

○委員　大伴家持については、万葉料理は万葉の館では出さなくなっていますね。また、例の岡益の石堂の裏の森に万葉の木を植えて、それぞれ歌を、それに関係する歌を上げています。33 歌人が祭ってある。あれに全部万葉の歌が載っておりますので、碑と一緒にちょっとそれを加えてもらえたらなというふうに思います。

池田光仲は、玄忠寺の荒木又右衛門、興禅寺の渡辺数馬を入れてほしい。彼らは光仲についてきたわけですので。時代はずれますが、仁風閣は池田家が寄進したものですので、これも関連づけてほしいと思います。

○委員　大黒様は童謡・唱歌の関連でも紹介してほしいですね。

○委員　大雲院は池田光仲さんが建立されていて、尾崎放哉さんの句碑があるのです。このエリアにある中川酒造さんの「放哉」という日本酒など、ゾーンとして連携する必要があるのではないかと思います。

○委員　この 6 人の人選は確かにいいと思いましたが、岡野さんと尾崎放哉のこの 2 人の方は、市内に目に見えるものがほとんどないかなということを感じました。岡野さんはお堀端に音楽碑が建っていて市役所の時報が「ふるさと」のメロディーを流していますけど。岡野貞一記念音楽堂みたいなものもあってもよかったのではないだろうか。倉吉がやっています菅楯彦大賞のように、名前をかぶせた賞というのも一つの方法ではないだろうかということを感じました。尾崎放哉に

ついても、やはりそういうことが言えるのではないかと思います。

○委員　1、2、3の人は、連携させて取り組んだ方がいいと思います。

例えば、尾崎放哉は小豆島で亡くなったのですが、興禅寺に尾崎家の墓地があり、4月8日の命日には有志が墓参りに来ています。今後の話として、尾崎放哉の句を組曲として作曲して、合唱団に歌ってもらおうかということを思っています。それから、市内のあちこちに句に合ったイメージのところに句碑を建ててね。形として放哉は鳥取市内に生きていたのだということで奉っていくべきではないかと思います。

それと、吉田璋也は、仁風閣、鳥取城址、これ全部の保存運動に彼が絡んでいるのです。砂丘が国立公園になったのも彼や川上貞夫の功績。岡益の石堂に志賀直哉を呼んできて長通寺を見せたり。しゃぶしゃぶの料理や専門の割烹店をつくっていますし、そこの器は全部民芸品。つまり鳥取の文化活動というのは、一種の民芸なのです。そういった意味で吉田璋也はクローズアップできるなと思います。

それから、田村虎蔵と大国主命。大国主命と八上姫も関係が深く、河原町がカヌーとかハンググライダーで八上姫杯ということでいろんな行事をやっています。今はなくなったけど、最近まで八上姫という酒をつくる酒蔵もありました。この機械にこの酒蔵を再開させるような機運を盛り上げてもいいと思います。それから、田村虎蔵、岡野貞一については、わらべ館を外すわけにいかないわけで、わらべ館の事業というものをこの中で紹介できる。岩美町は毎年田村虎蔵の名前をつけた合唱コンクールをやっています。岡野貞一については、市内のあちこちに音楽碑があります。

それと、池田光仲については、城下町と絡めて打ち出すのは必要欠くべからざることです。岡崎邸だとか池内邸だとか、全部これに絡んできます。そういう意味で池田光仲の存在も大きいと思います。

○委員　まず吉田璋也。私、吉田璋也生誕100年のときに朝日新聞に彼の話を24回連載して、それをまとめて本を民芸協会で出させていただいて、編集主幹やりました。人を取り上げていくときに、人の偉業を取り上げていくのか、その人の精神を取り上げていくのか、ポイントがあると思いますが、吉田璋也の場合は、人としての姿勢に私自体は非常に感銘を受けました。地域の文化財を大事にすると同時に、物づくりを通して人づくりをしていったのではないかなということが感じられます。彼は鳥取を「美の王国にしたい」と言っていますが、その根本は「地域に対する愛情」ではないかと思います。この地域に対する愛があったために、砂丘や建物資源を保護し、物づくりをし、つくり手をふやした。さらに、農村、漁村の収入に役立てたいということで、捨てるイカのはらわたを使ってインクをつくった。

愛という意味では、大国主命もやっぱりウサギなどの動物愛、池田光仲も、一角獣の麒麟獅子舞をしましたが、これは家族愛とかそういうことになるでしょう。岡野貞一は郷土愛とか。ある意味では、尾崎放哉も句で愛を定義したのではないか。「美の王国」を「愛」という考え方で作っていければいいなと思います。

また、人を取り上げていくときに、その人の持っている機能というのがあるのです。吉田璋也はプロデューサーと言っていますね。鳥取ガスの創業者の児嶋さんは、僕らから見ると今で言うベンチャー企業の挑戦者だったのではないかなと思います。やっぱり人を取り上げるということは、その人の精神を伝えなければ、それを継承する人が出てこないのではないか。そこの面にスポットを当てていく観光の仕組みというのがあっていいのではないかなと思います。演出家という機能があったり、建築家という機能があったり、作家という機能があったり。そういうふうに分けていくと、吉田璋也はプロデューサーであり、人をつくってきた人。では、大伴家持は何なのかとか、そういった観点で人を捉えていけば、また違った関心も持たれるのでは。

もう一つ、「食」についてですが、私が商工会議所の青年部で3年間補助金をもらいながら、最後には鳥取市合併する7町村の方たちに出てもらってG7をやり、うまいもの自慢をしました。

食材はいろいろあるわけですが、料理は何かと考えたときに、鳥取はカレーのルーの消費が日本一だということがわかったのです。これは要するに鳥取では共稼ぎが多いので、カレーライスのルーをたくさん使っているわけです。ということで、喫茶店などいろいろと口説いて創作カレーをつくってもらいました。私はベニ屋さんを口説きました。なぜかというと、鳥取カレーをやるときに本家本元が入らないと本流にならない、亜流になるということです。手を煩わせないようにラッキョウとゆで卵がつくだけなのですけど、簡単に月の砂漠みたいな形で出しました。こういう方法で 1 つの食の素材にどんどんみんなが参加してつくれるような仕組みにする。それに吉田璋也のように鳥取の器を使う。そういうときに地域産品の推奨を進めていかなければいけないと思います。彼らたち作り手は、そんなもうけようとか思ってない。自分たちの食を、物を、器 1 個でも買ってくれるような仕組みをぜひつくってほしいということをいつも言っています。吉田璋也が最後に取り組んだのは、たくみ割烹を舞台にした生活的美術館というもの。鳥取の器で鳥取の料理を食べることによって鳥取を深く体験できる。例えば白兎海岸のようなところに鳥取の迎賓館として鳥取の文化が味わえるような舞台が設定できればと思います。

さらに全国的に見ると、やはり山陰という視点でくくる必要がある。全国的な視点、アジアの視点で見れば、鳥取、松江、米子は一体となって、島根にはないものが鳥取にはあり、逆に、鳥取にないものは磨いていくような考え方で大観光時代に向かわなければいけないと思います。

これは、日経新聞を使って 3 月 23 日にイメージ広告を出したものです。そのときに橋本興家さんという版画家の版画を使い、尾崎放哉とか島崎藤村とかの砂丘を詠まれていた歌をいろいろと載せましたら、非常に反響があったのです。この中で選んだ歌というのは、実は吉田璋也が「砂丘への招待」という古い書籍の中で選んだものをあえて紹介しています。

もう一つ、これも同じく日経新聞で、中島菜刀の麒麟獅子を使いまして、鳥取県の情報発信事業をやりました。今の時代は妖怪ブームのようで、40 年前もそうだったらしいですが、世の中が成熟し切った時代には、七福神伝説とか妖怪伝説のブームが必ずやってくるらしいのですね。こういったときに麒麟獅子の伝説をきちんと紹介すると、関西とか首都圏の文化に飢えている人たちは、鳥取はまんざら捨てたものではないと反応してくれます。

「玉」はたくさんあるはずで、あとは磨き方と演出の仕方をきっちりとすればいいのではないかなと思います。

○委員　民芸というのは、やっぱりその地方の風土の中で育ったもの。自然の中で、生活のものとして育ってきたのですから、自然の要素も加わってきますね。

それから、万年筆博士なんていうのは、インターネットで世界からでも問い合わせが来るぐらいなのですが、鳥取の人が知らないということもあります。民芸のほかにもそういうものも取り上げていくことができるのではないかと思います。

それから、岡野貞一は確かに物はありませんが、唱歌を通じてみんなの心に宿っているものを導き出すということができるのですね。これもイメージを膨らませていくと、自然や伝統行事とか小さいときのことが思い出される。用瀬の流しびなだとか、そういうものも行事の中に入るし。やっぱり童謡からイメージを膨らませて人の心をつかむことを考えていったらと思うのです。

○西澤企画推進部長　やはり、人と場所というのが具体的に結びつかないと、なかなか観光資源にはならないですね。例えば、菜の花畑の歌の情景がここに来れば見られるとか。偉人を観光資源として整理する、実際に結びつく場所なり、食べ物なり、そういう実物を取り入れるように考えなければいけないなということを感じたわけです。

あとは、先人の偉業を顕彰するという意味で、大伴家持杯のように名前に冠をつけるのはお金がかかりませんし、そういうことをやっていく必要もあると感じました。

○林副市長　ずっと以前に童謡・唱歌の風景百選ということで県内のスポットを選定していて、千代川の菜の花畑の写真を撮ったりということをしていますので、そういう場面をもう一度 PR していくということは十分できると思います。そういう形で売り出し、保存していかないと、いつの

間にかなくなってしまったら困るので。

○委員　それから、岡野貞一の少年時代は醇風小学校のところに牧場があって、菜の花畑があったらしいです。昔といっても明治の初めですが。鈴木さんが作られたのか、この辺りにあった菜の花を見て何々といった解説を看板にして立てていますね。

○委員　それぞれの人の位置付けを明確にするために、テーマを決めたらいかがでしょうか。例えば、「道」シリーズということで。まず岡野貞一のところからいかせていただきますが、いかがでしょうか。

○委員　岡野貞一、田村虎蔵は、実は童謡ではない、唱歌なのです。文部省唱歌です。童謡というのは、大正の末に、今ここに出ています鈴木三重吉という男が「赤い鳥」という雑誌を出して、唱歌に対するアンチテーゼとして童謡を始めているのです。だから、鳥取県のやっているのは、それで童謡・唱歌と 2 つつけているのです。

○委員　ここはとりあえず「童謡・唱歌へのみち」ということで。

吉田璋也さんはどういうことになりますでしょうか。

○委員　民芸調ですね。

○木村観光コンベンション推進課長　僕らの世代では民芸という言葉が一番なじみがありますね。

○委員　民芸という言葉は、柳宗悦、河井寛次郎、浜田庄司の 3 名の話し合いで作った言葉だったんですが。最近は民芸という言い方は売れ過ぎてある意味手あかのついた言葉になっている。新しい言葉が必要かもしれません。

○委員　手仕事というのはどうです。

○委員　日本的ですから、和を入れたらどうでしょうね。和の何とか。

○委員　私はちなみにそれを和作美（わさび）と言っています。和を美しく作るということで。

○委員　とりあえず「民芸へのみち」にしておきます。

次に大国主命。「神話へのみち」でいいですか。

大伴家持。沖さんいかがでしょうか。

○委員　万葉というのは。

○委員　万葉とつけたいですね。「万葉へのみち」。

尾崎放哉。これはどういうことになるでしょうか。

○委員　スタンダードは自由俳句ですけど、自由俳句だと放浪俳句みたいな。何か取ってつけたような感じがする。

○木村観光コンベンション推進課長　何となく、この人はずっと自分を追い込みながら、結果としては追い込まれながら、ずるずると動いているのではないですか。何か山頭火のような自由濶達に動いたのと、何となくちょっと感じが違う。

○委員　自由というのは、旅はフリーな時間ですよね。自由というのはあってもいいかもしれませんね。

○委員　ちょっととりあえず自由へのみちにして。

池田光仲。これはいかがでございましょうか。

○委員　城下町鳥取へのみち。

○委員　絵師なんかも結構いますが、中島菜刀だとか、小畑稲升だとか。ああいう絵がどこに保管してあるか知らないけども、美術館の倉庫の中にあると思うのだけども、そういうのを観光客に見られるようなものが欲しいな。

○委員　池田家へのみち、お城へのみち。

○委員　32 万石へのみち。

○委員　32 万石へのみちにしましょう。

では、尾崎放哉、最後。

○委員　何で今もてはやされ出したのですかね。

○委員　表現の自由さ。

○木村観光コンベンション推進課長　あんまり幸せな句のイメージが伝わってこないのですけど。温かいものがあんまり伝わらない。

○委員　アンハッピーだから、やっぱり今受けているのでしょう。

○木村観光コンベンション推進課長　何となく孤独感というか、そちらの方がすごく伝わって。

○委員　解句を読んでいると放感みたいなのを味わうんですわ。日常や上司にしばられていて。

○委員　放哉へのみちはどうかな。自由解放へのみちと言ったって、来た人が「何だこれは」と思ったらいけないし。

○委員　1つ提案なんですが、1から6をつなぐ、全体をくし刺しにする言葉を考えてください。これは商標登録をとりますので。

僕流に言わせてもらうと、鳥取というのは、やっぱり全国で唯一麒麟獅子のある文化ですからね。これは何を象徴しているかというと、平和のシンボルなのです。麒麟のみちはシルクロードにつながって、これからアジアとかつながっていきます。だから、「麒麟路回廊」というような言葉で全体をつなぐことができたらいいなと。

○委員　麒麟自体をもうちょっとメジャーにしていかないと。やっぱり一般的にはまだマイナーですね。

○委員　実は、今考えているのが、キリンビールのボトルのラベルに地域限定で麒麟獅子のデザインにしたもの載せる。キリンはスポンサーにしやすいわけでキリンには麒麟獅子のコレクションたくさんあるという話も聞いていますし、その麒麟の獅子頭をキリンがビールのラベルとして出してくれるという、鳥取市とのキリンタイアップで大きな効果があると思います。「麒麟」は因幡をくし刺しできる言葉だと思います。

○委員　駅前商店街が麒麟を売り出したことがありましたが。今はちょっとストップしているようですが。

○委員　私の認識では、駅前商店街としての自分たちの商店街の振興策として、キリノロジー、麒麟学ということで、その小さな活動をされていたんですが、鳥取市全体としてとかの面的な活動になっていないですね。

神社仏閣が観光資源といえるかどうか分かりませんが、麒麟獅子というものをとらえたときに、いわば因幡の東照宮の別当寺である大雲院の資源を活用して、光を当てていかないといけないと思います。

それと、麒麟獅子というのは聖獣で神獣なのですよ。御利益はシルバー世代には重要でして、鳥取に行けばおいしいものがあるし、麒麟を見て、名所を回って、御利益あるのではないかなと。これは結構観光動線として大きいのではないかなと思っています。

○木村観光コンベンション推進課長　麒麟ってすごくいいと思うのですが、イメージとして赤が中心の色なのかなと。

○委員　実は、今は麒麟獅子舞で赤を使っていますけども、因幡東照宮のメインカラーは緑です。それを知らない人が多い。要するに、麒麟というのは一対なのです。雄と雌というぐあいに。だから、東照宮の獅子は二対です。因幡東照宮の場合は緑です。それで、いわば城主の一番メインのものは余り外に出てなくて、一般の神社の赤い麒麟獅子がたくさん出ているんです。

○委員　だいたい固まってきたので、もう少しこういうことを足したらいいのではないだろうかという御意見ありませんでしょうか。

○委員　それぞれ拠点を決めた方がいいと思うのですよ。大国主命で言えば、今度白兎道の駅というのができますし、白兎神社等もありますので。

○委員　ことしの正月も白兎神社に初もうでに行きかけたのですけども、参道が真っ暗ですね。勝谷神社に行きました。

大伴家持は、万葉歴史館というのがありまして、いい建物なのですけど施設としては赤字を出

している。このまま放っておくわけにはいかない。

○委員　池田光仲は。

○委員　やっぱり鳥取城。

○委員　岡野貞一・田村虎蔵は。拠点はわらべ館ということですね。よろしいですか。

吉田璋也。これは民藝美術館でよろしいでしょうか。

尾崎放哉さんは。

○委員　これは興禅寺でしょうな。墓があるし、句碑もあるし。

○委員　あとはキャッチコピーになりますか。

○委員　ふるさと麒麟回廊。

○委員　そういうイメージですよね。ふるさと麒麟回廊。評判がいいので、決定をさせていただきます。ふるさと麒麟回廊。ふるさとは平仮名で、麒麟回廊。

それで、総括とします。ありがとうございました。